

新編相模国風土記稿

しょうへいざかがくもんじょちしらべじょ

作者:昌平坂学問所地誌調所

成立:天保12年(1841)



解題

Keyword

- 官撰地誌
- 相模国
- 間宮士信
- 「相州文書」
- 「大日本地誌大系」
- 「新編鎌倉志」
- 「鎌倉攬勝考」

江戸幕府の昌平坂学問所地誌調所が『新編武蔵風土記稿』(#22、以下、必要に応じて『武蔵』と略記)に続いて編纂した官撰地誌。近世後期の相模国についての最も基本的な史料である。相模国は全域が現在の神奈川県に属している。なお、本書は『武蔵』の姉妹編になるので、前項の解題も併せて参照されたい。



(翻刻本)『新編相模国風土記』鳥跡蟹行社
大住郡下糟屋村 太田道灌墳墓図

■ 成立経緯

文化7年(1810)から武蔵国の地誌編纂事業を開始した昌平坂学問所地誌調所は、これと並行して文政7年(1824)鎌倉郡から相模国の廻村調査に入った。相模国の調査は文政9年まで高座・三浦・愛甲・大住の各郡で進められた後、江戸府内調査のため一時中断したが、『新編武蔵風土記稿』完成後の天保2年(1831)に再開され、同6年にほぼ終了した。調査にもとづき天保年間に草稿が順次作成され、天保12年(1841)『新編相模国風土記稿』の原稿が完成した。浄書本の将軍への献呈時期ははっきりしないが、紅葉山文庫への入庫は嘉永4年

(1851)と記録されている。編集に従事したのは『武蔵』と同じく間宮士信(まみや・ことのぶ)を筆頭とする地誌調所役人で、首巻の凡例には27人の名前が挙げられている。また、津久井県については、『武蔵』で多磨郡等を担当した八王子千人同心が、引き続き命を受けて調査・執筆を行った。(「#21 鎌倉攬勝考」参照)

■ 内 容

首巻と本編125巻から成る。『新編武蔵風土記稿』の編集方針を引き継ぎ、構成・内容・体裁等ほぼ同様である。調査時に収集した古文書(『相州文書』(#37))を関連箇所引用し、風景・社寺・古器物等の絵を挿入しているのも共通である。『武蔵』との相違点をいえば、本書は巻之2「建置沿革」、同3「山川」が簡略で、逆に巻之4～11の「芸文部」に収録された文献は圧倒的に多くなっている。また、各郡冒頭の絵図は、『武蔵』が「正保改定図」「元禄改定図」の2点であるのに対して、これに「今考定図」を加えて3点としている。書名は「国」を省かずに表記されるのが普通である。

巻之12から巻末までを「村里部」として、相模国8郡1県が記述される。津久井のみ「県」と称するが、郡と実質的な違いはない。各郡(県)については、最初に「図説」として絵図とともに郡の位置、村数、石高、道路、沿革、地域名(郷・庄・領等)、山川、産物等を概説する。各村(町・宿・新田)については、位置・戸数・面積・領主・山川・社寺・旧跡・人物等を記載している。主な地名の読みを借字で表していること(例：小動村＝古由流紀牟良こゆるぎむら、酒匂川＝左加和可波さかわがわ)は本書の特徴といえる。また、『武蔵』編纂の経験を踏まえて、全体に記述に統一性があるとされる。なお、三浦郡池子村は鎌倉英勝寺領で水戸藩管轄下にあり、十分な調査ができなかったため、項目だけで記事を欠いている。

■ 諸 本

将軍献上の浄書本は明治6年(1873)の皇居火災で焼失して現存しない。その後新たに書写された59冊の完全本が国立公文書館内閣文庫に所蔵されているが、その底本は不詳とされる。活字翻刻本は明治17年(1884)から『新編相模国風土記』洋装本全5冊として、1～3巻が出版社・鳥跡蟹行社(ちょうせきかいこうしゃ)、4・5巻が発行人・谷野遠によって刊行された(以下、これを仮に「明治本」という)。この明治本は底本、編集方針、出版の経緯等について全く説明がなく、出版社・発行人も実態がほとんど不明であるが、以後の翻刻本はすべてこれに基づいている。

現在、最も普及している雄山閣『大日本地誌大系』本は、戦前の第1期以来、明治本を底本に、本文の片仮名を平仮名に改め、明らかな誤植を訂正したほかはそのまま翻刻していたが、平成の第4期で初めて内閣文庫本との校訂を行い、これを『新編相模国風土記稿』第2版としている。また、同シリーズは、第3期以降、「新編鎌倉志」及び「鎌倉攬勝考」から成る1巻を

『新編相模国風土記稿』第6巻としているが、これは出版上の便宜にすぎず、本来の風土記稿とは別の史料である。

昭和初期に昭和天皇即位の大礼を記念して相武史料刊行会が翻刻した『新編相模風土記』全3冊は、明治本を編集したもので、『新編武蔵風土記稿』の橘樹・久良岐・都筑3郡を1冊にまとめたものとセットで刊行された。名著出版と千秋社の翻刻は明治本の複製である。

本書は近世の神奈川を知る最も基本的な文献でありながら、内閣文庫本と翻刻本の異同等未解明の部分もあり、今後の書誌学的研究の進展が待たれる。

■ 検索手段

大部の史料を有効に使いこなす検索手段が完備していないのも『武蔵』と同様である。『大日本地誌大系』は第1期から各分冊巻末に要目(細目次)を付し、その後も簡単な新旧地名索引を作成するなどしてきたが、最新の第4期では索引編1冊を独立させ、ここに新旧地名対照表と索引を収録した。しかし対照表・索引とも、分冊単位に編成されているため全体を1度には引けず、索引の項目数も十分とはいえない。名著出版の複製版に別冊として付された「新旧地名対照総目録」は、新→旧、旧→新の町村名対照表を含む。このほか個別研究として全体にわたる寺院名索引が作成され、雑誌に発表されている。



構成

- 首巻 凡例(編纂従事者名簿を付す) 総目録(各巻の題名一覧)
- 巻之1 図説(国絵図とその解説、六国史等から相模国に関する記述を抜粋)
- 巻之2 建置沿革(国名・国司・国府等に関する記述を古典籍から引用)
- 巻之3 山川 名所国産附(山川等の解説、各地の産物)
- 巻之4~11 芸文部(相模国に関する紀行、漢詩、漢詩文等を収録)
- 巻之12~21 足柄上郡(あしがらかみぐん)(94村。南足柄市・大井町・松田町・山北町・開成町の全域、中井町の大部分、小田原市・秦野市・箱根町の一部)
- 巻之22~38 足柄下郡(あしがらしもぐん)(92村。真鶴町・湯河原町の全域、小田原市・箱根町の大部分)
- 巻之39~41 淘綾郡(ゆるぎぐん)(19村。大磯町・二宮町の全域、平塚市・小田原市の一部)
- 巻之42~53 大住郡(おおすみぐん)(119村。伊勢原市の全域、平塚市・秦野市の大部分、厚木市・中井町の一部)
- 巻之54~58 愛甲郡(あいこうぐん)(43村。愛川町・清川町の全域、厚木市の大部分)
- 巻之59~68 高座郡(こうざぐん)(109村。茅ヶ崎市・相模原市旧市域・大和市・海老名市・座間市・綾瀬市・寒川町の全域、藤沢市の大部分)
- 巻之69~106 鎌倉郡(かまくらぐん)(91村。鎌倉市・横浜市戸塚区・泉区・栄

#23 新編相模国風土記稿

区・瀬谷区の全域、横浜市港南区の西部、藤沢市の一部)

卷之107～115 三浦郡(みうらぐん) (80村。横須賀市・逗子市・三浦市・葉山町の全域)

卷之116～125 津久井県(つくいけん) (29村。相模原市津久井地区の全域)

※各郡に注記した村数は本文記載の数。現行市町村の該当地域は大体の範囲を示す



史料本文を読む

<翻刻本>

- 『新編相模国風土記』全5冊 鳥跡蟹行社(4・5巻は谷野遠が発行者) 1884-88 [K291/1]
- 『新編相模風土記』全3冊 相武史料刊行会 1929-30 [K291/474/1～3]
- 『新編相模国風土記稿』全5冊 雄山閣 1932-33
(『大日本地誌大系36～40』[第1期]) [291.08/2]
- 『新編相模国風土記稿』全5冊 雄山閣 1958-62
(『大日本地誌大系13、15、17、19、22』[第2期]) [291.08/6]
- 『新編相模国風土記稿』全5冊 蘆田伊人編集校訂 雄山閣 1972
(『大日本地誌大系19～23』[第3期]) [K291/1A]
- 『新編相模国風土記稿』全5冊 名著出版 1975 [K291/1B]
- 『新編相模国風土記稿』全4冊 千秋社 1983 [K291/1C]
- 『新編相模国風土記稿』第2版 全6冊 蘆田伊人編集校訂 圭室文雄補訂 雄山閣 1998(『大日本地誌大系19～23、索引篇』[第4期]) [K291/1D]



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆ 大森正且「『新編相模国風土記稿』寺院名索引」(『駒沢史学』(28) 駒沢史学会 1981 [Z205/11])
- 『八王子千人同心の地域調査：武蔵・相模の地誌編さん』八王子市郷土資料館編 八王子市教育委員会 2005 [K291/708]
- ◆ 福井保「新編相模国風土記稿」(『江戸幕府編纂物 解説編』福井保著 雄松堂出版 1983 [027.1/1/1])